

## 出会いの場としての図書館

とおやま こういち  
遠山 公一  
(文学部教授)

ますます図書館が電子化している。いまさら当たり前の話だが、ネット上で多くの論文をダウンロードすることが出来るし、むしろ古い書物ならば、電子化されてネット上でアクセスできる割合が高くなった。そんな最近の風潮の中にあって、いやそうであるからこそ、人との出会いの場としての図書館について話したい。

「その論文を書いたのは私なのだけれど・・・」

1990年頃、当時新進気鋭の研究者、ボストン出身のカール・ブランドン・シュトレルキとの出会いは、向こうからやってきた。東洋人のまだ学生が自分の書いた論文を読んでいることが興味深かったのだろうか、一緒にお茶をしに(イタリアだから、エスプレッソをしに)図書館を出て、シエナ美術に関して、話題にこと欠かなかった。それ以来、フィレンツェで、東京で、フィラデルフィアで会い、かけがえのない友人となった。

「その本を書いたのは私なのだけれど・・・」

顔を上げると、笑顔で机の前に立っている英国紳士。ウォーリック大学のジュリアン・ガードナー教授と初めて出会ったのは、忘れもしない2002年のことである。それ以来、英国やローマのお宅に何度となくお邪魔し、ドイツ人で美術史家であるクリスタ・フォン・トイフェル夫人と慶應にもゼミをしに来てもらった。

向こうからやってきた出会いはこの二つ、けれども私から勇気を奮って話しかけたことも幾度かある。話しているうちに、「台座」というテーマを共有する研究者であることを知って意気投合したこともある。パリのエティエンヌ・ジョレ教授と出会ったときのことだ。

出会いの舞台は、フィレンツェのドイツ美術史研究所。今から120年程前、1897年にドイツ人研究者たちがイタリア美術史を研究する拠点を作ろうと始めた図書館にして研究所である。それは、ドイツ政府が支え続けた美術史研究のメッカであり、2002年からはマックス・プランク財団により民営化され、いずれも美術史研究にあてられたミュンヘンの中央研究所、ローマのヘルツィアーナ図書館、そして昨年(2013年)からはパリのドイツ・フォーラムとも所蔵カタログを共有する。そこには、美術史関係だけで

36万冊以上の蔵書、1070タイトルの定期刊行物が集まり、そして61万枚もの写真資料を備えるフォトテーカー(Photo Library)を併設する。

その地は、フィレンツェ、イタリア・ルネサンス発祥の地。数多の芸術品を見に、多くの観光客が美術館や聖堂に集まる。さらに、研究者が集まる施設が沢山ある。図書館は、人口数十万のフィレンツェに、500以上あると聞く。その中には、イタリアの国立図書館や国立古文書館のほか、フランス、英国、オランダなどヨーロッパ各国が国単位でもつ研究施設、アメリカのように大学単位でもつ研究所(ハーヴァード大、シラキュース大など)も含まれる。そのようなフィレンツェにあってもなお、ドイツ美術史研究所は一際輝かしい歴史と権威をもって、君臨している。そこにはドイツ人だけでなく、地元のイタリア人も、そして日本人も、世界中の美術史研究者が集う。高名な大教授も、大学院生と同じ長机を共有して勉強する。

私は、1980年代後半にフィレンツェに留学したとき以来、毎年夏、少なくとも2、3週間、この「ドイツ研」と日本人研究者が呼ぶ、そして他の人たちはクンスト(独語で芸術の意)と呼ぶ、この研究所に通う生活を20年以上続けてきた。その研究所に、昨年度塾派遣留学でもってイタリア・フィレンツェに遊んだとき、訪問研究員という肩書きでスタッフにしてもらい、図書館内に一室をあてがわれた。むしろ訪ねてくる人々を迎え入れる立場になって、フィレンツェ大学や世界各地の研究者や大学院生と話しをする機会が増えた。名前を知るチャンスがなければお互いを知ることは容易ではないけれど、スタッフとなった今、私の机の上には名札があった。

そのような出会いの場となるのは、やはり大半の書物が開架でもって、かつ専門性の高い図書館の場合であろう。全く私事であるが、かつて父もそのような場を求めたのではないかと思う。遠山音楽図書館、のちの日本近代音楽館(現明治学院大学図書館付属)を創設した父\*は、今、病床に伏して、応える術を知らない。私はそんな図書館で育った。

\*遠山一行、2014年12月10日逝去